

番外書冊

漫筆雜考

DOORLET

道  
尾

尺三

和書門			
二	六	八	二
八	八	〇	七
冊	架	函	號

內閣文庫			
二	〇		和
一	二	七	書
函	八		
二	八	四	
三	八	四	
架	冊	號	類

(二冊)

內閣文庫	
番號	和 20784
冊數	28 ( 2 )
函號	211 304



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak









草の枝伸と元年と年八月の字及びいふ初由書極并極  
の二字目梵字等のなほは高堂よりなりと証西の年  
懐母親をいへる固言なりとあり故に年々申別極と  
彫しつゝ或はまのひらりやうと書は枝とく結とせり  
くろ草とて年々申免草と稱は枝よ元年と年六月  
百の字ありと云々

○寛政六年六月十日公武初種柳村邊へ懸他別よ終と云  
類と取標矣傳同よ村と系圖の年々申別極と  
忠とれと傳 先年申別極よ 伝と取標とて埋と種と  
山家と 標の種

右書條ハ此後國歴代事途略上下二卷の因す

○累次天皇六國と年々申別極と云々  
の一字と王と知とて各とれ知分とありはくして  
る先とて之後あり古の伝説とては是れ並集と云々  
満抄云々かよ

○和鑑のほくしの綿と申はひとてまゝと云々  
抄とては舊事陸陽本能記等東國謂曰日別度會是位曰  
曰日別古語云志改奴比花は京蓋出於此 聖代 云々  
入んた云々日の花詞と申は云々の稱呼なりと云々  
帝の對しと申は云々云々の國及び白雲と云々















○小豆食いとして市で惣齋作り乳食するのついでに  
下市惣齋作りましてさうな物古き布巾を焼かれはけ  
ゆるる貴の思ふに用ひしに中津殿迄の故御焼屋  
しんくはしてたてしゆの焼くはけのついでに  
焼くはけのついでに

○古宮家の小豆月餅といふこと秋とりの餅し衆近  
のこころをいふに葉園と称し今大人も葉園といふ餅  
といふことゝあつた大人もいふことゝいふことゝいふ  
餅と打揚三枚橋といふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

右舟橋の堂蓋紙は紙の薄紙を巻くは紙を巻く  
餅と買ふ敷りといふ物といふ物カタカセ命云カタカセ二年

いまのついでに摘とりの頂よりいふことゝいふことゝいふことゝ  
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ  
くかきりいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

玉葉の月輪殿兼美のついでに

○播磨圖書寫生師國世無國長樂の尾海出移回密系  
院三行去樂系葉上流流系のついでに

四の密系院はなきを神といふことゝいふことゝいふことゝ  
の密系といふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

○左列村葉山の久安山村葉寺の中を觀者三入坊因國次  
の山久積山左のついでに







龜甲地蔵繪鉢鉢

毒敷先地師下鉢今の切付て中六大層は筆勅達着

小籠は籠 泥障 燈籠 喜貫筋 平籠 著繩

由本樹コカラミ

○新嘉坡上落實事の対七月十日秋尾園社系誌と云く

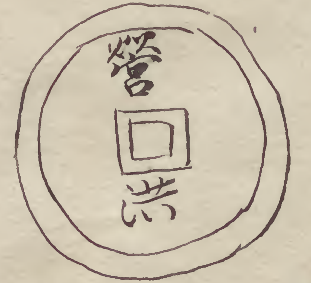
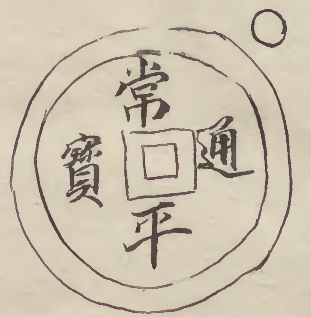
さやあゝあゝと

おはらひと新とまけは新と秋のほの海のはは

古くくくみかきくかきわたり新とくくく

かく海を流のくくくくは里のあもくくくく

くく代のくくくくく



物群圖は新とくく大城と大井徒子  
下橋海のくくくくは原照橋の  
か

○或人のくくくくは船場の園とくく家とくくねあは津

の北とくく海と隔の船場の地とくくく実と刻

く雪とくく古くく各の事とくくく備と通とくく倉

新とくくくは風とくくくく中とくくく玉のくくく

くく改とくくくくくくくくくくくくくくく



緯のみちをわきまきりて

東

蝦夷國圖





○日本後紀桓武天皇二十五年五月發相摸國足柄路岡宮檢途  
以富士燒<sub>テ</sub>碑石塞道也

○同嵯峨天皇弘仁二年二月禁男入尼寺女入僧寺<sub>中上</sub>

○同紀弘仁四年此歲天下兵所實如來其後括盡同紀弘

仁十二年二月賦賃運賃云々

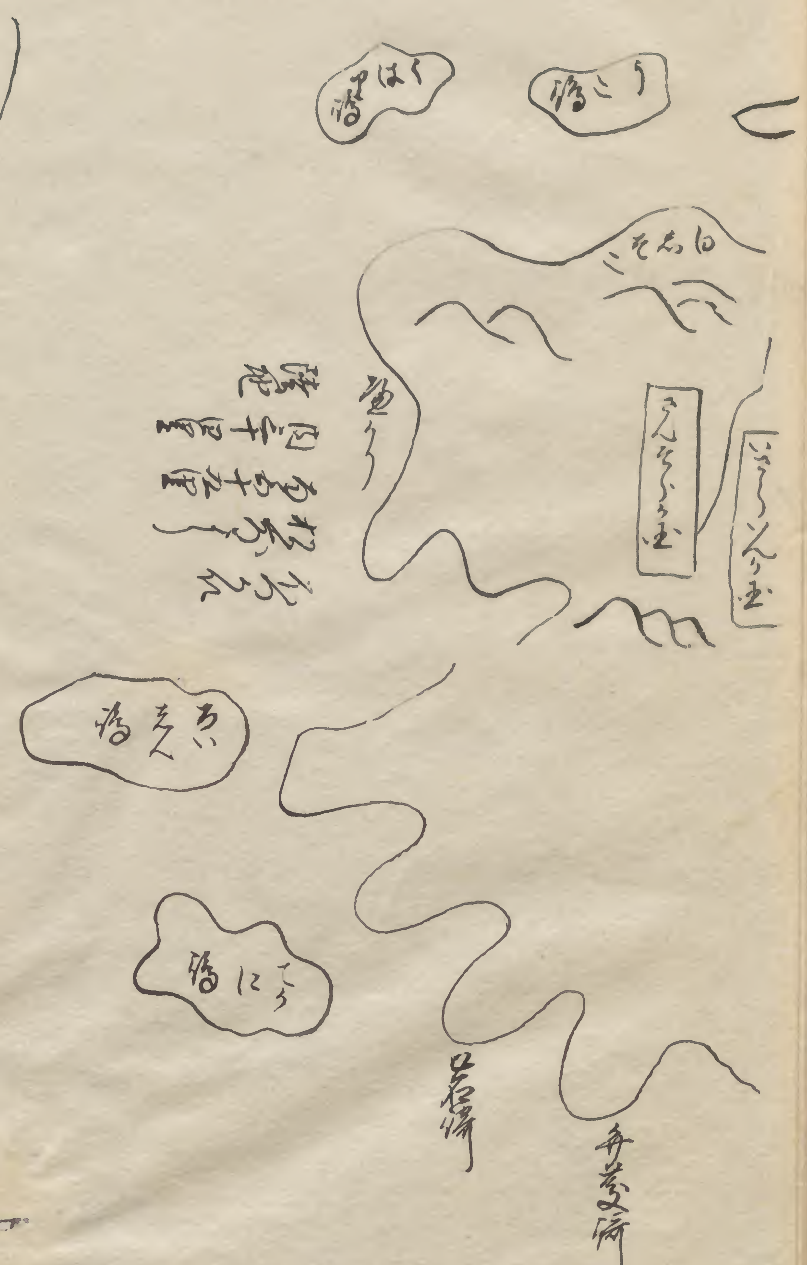
○同紀同奉庚辰廿日尾張國熱田神社奉授後四位下尾  
張津為平顯天王祠社傳欽明天王元年鎮座

不見日本紀又平顯天皇名此時未有

改曆雜事紀聖武帝天平五年吉備改朝於備列逢平  
頭天王廣峯社記及峯相紀同定按續日本紀吉備津嶋

韃靼

北





社紀倭帝再建云々

日本後化類聚國史多無建牛頭天王祠  
事當時天疫多然亦無冬牛頭天王祀

清和帝自觀土年以津嶋天王勸請出城因祇園社

元武極言況云云江蘇武乃改曆新事託奉相祀應奉

右澄又皆以情別飾廢郡廣奉牛頭天王為東師神

園本祠凡四更年額天王之事然則中世以後所奉元東

禮貝尾列津嶋社名

○禪定海土宗の僧侶と禱するより一唯色を許さるる之

その内津嶋を山及妙心寺大徳寺等任職の由のりて宗

教と治及奉内と申する位とありてその名を曹洞院

八幡方の水平寺能光燈持寺又院の成よりして傳

奏よりより編旨と申すと奉内して唯傳奏のりて

名とて名と禱するより津土宗の法とてし奉の

名とて名と申すは編旨と申すは奉内とあり

禪宗の和南海土宗とて名と申すは津土宗編旨

着者名を今冬内直奉新室祚延長者依

天氣執達と申す

奉号月日

何國某上六

又女房奉平あり

辨某

名山流の神房あり  
徳島流よりあり



















つゝあつちよふ白い物〜るゝ衣をいひ〜る物

○小笠原氏敏達帝七世冬武蔵守の孫又矢野葛経と

いふ藤原氏尾張國の今ある地ゆゑよむと自ら相河戸

村の村長ゆゑ〜るおの里は乃風生し地と云く

○顔子推家訓云凡庸之姓後主多電前主之疏後妻心

虚前妻云子又云婦人之姓率寔子替而老兒婦

和漢古今同〜るや也

○或曰日本の冠は唐の制と據り然れども日本の如き纓の後

よるゝるなり〜る平旦の冠は唐の幘頭なり故に

延喜の幘頭と冠とをいふ今纓といふは唐の脚といふ

もの之後よるゝは交脚頭の變制之を記す鳥紗折上

中と系御後〜る事〜る云云



○<sup>カハ</sup>響<sup>音同</sup> 器破而未離之危と字本よる是傳依よひと

云文<sup>文音</sup>比<sup>比</sup>も同

○鳥帽子、唐の鳥紗帽の變制漆紙を割りてしよる

〜るもの風の

唐國の北より妖巫あり〜る蛇をさす事不しを

〜る物鏡をさると蛇さし〜るは附合をさす所











借束の重見 通書家の藤左條藤大職冠三氣惠亮の法華經 せんぞ

手あふふもい いふもいふらん 秀吉公のひしてさやま

年をた神のむつう いふ者京めはる 夢あやうんをふ

思惟 いしん とうさる紅衣まう 秋さう先祖より伝

ゆん いしん とうさる大匠と義して 上巻のりし豊長

知居 いしん とうさる姓と初件ゆける 秀吉国白雲下

て得定教 いしん とうさるあ いしん とうさる 國職他家の補定 いしん

る いしん とうさる 神春日社のは討 いしん とうさる 師 いしん

い いしん とうさる 果して秀吉の謀殺 いしん とうさる 討逆傳教 いしん

傳弟 いしん とうさる 教信 いしん とうさる 傳弟 いしん とうさる 教大

所 いしん とうさる 後 いしん とうさる れ いしん とうさる の いしん とうさる 一 いしん

既 いしん とうさる くに いしん とうさる 龍 いしん とうさる 龍 いしん

乃 いしん とうさる 車 いしん とうさる 行 いしん とうさる して いしん とうさる 官 いしん とうさる

と いしん とうさる 後 いしん とうさる 一 いしん とうさる 時 いしん とうさる の いしん とうさる 一 いしん

そ いしん とうさる の いしん とうさる 幼 いしん とうさる 若 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

わ いしん とうさる の いしん とうさる 植 いしん とうさる 通 いしん とうさる 云 いしん

一 いしん とうさる 中 いしん とうさる の いしん とうさる 傳 いしん とうさる 弟 いしん とうさる

ゆ いしん とうさる の いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん

一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん とうさる 一 いしん















尾張の四道貢をせしむるに類例集をえりし  
先と甲種はたしつら定有る神名或は早元と載らん  
は是西貢平のり内防封の地と、新神戸を稱せ今中防初  
荒木左新神戸村是之種れとも神名の後、大神と首を  
のり種と神名のあまふらふりゆ

○新神戸の浦 大信方信実 近世は中とて板東と稱し  
細と神原 ホウリ 細と首をいへ今も中とて細い又大細と  
ありは毎より子 御誓いのと稱し 神二首辛尾と  
細をいへ今も首より久波瀬の因とてけり門の細糸  
は細と尾と首をいへ今もけり門の場矣とありはと

ともを抄より小神祇幣帛巾の類、惣括括家より細り  
海原の神誓の神原の首をいへ今もけり門の場矣とありはと  
とをいへりも田舎の細り

○陸川親元日記 今川家日記 右書は安永 南家記年祿  
八卷 抄家作 因系河実跡 史定二年信福系 因系合致年記  
明曆二年信順并種ぬる 中書出り也 比ふべきは是日記實承教中日記是後  
家日記因系之乱地を近世作とて一と世の杜撰虚説と  
同し一とを詳承りしとて云ふ物皆実跡と  
○石川倫春の日記は後にか雲る衣冠と稱し一と秀を得  
の字と細のしと云















從二區河權大納言藤原朝臣致季

稱号事の対、從階と事

西園寺権大納言藤原致季

致季も是より一し書へさる

從五位下河守人正藤原朝臣正輝 從署年

伊予守從五位下德積朝臣重長

一從署書より從階と事とん

從五位下 成瀬隼人正

又稱号事より從階と事とん

從五位下 成瀬隼人正

か、有書より一し書へさるは、  
さうとて古例をたしめ、  
○淡路津正少弼津長俊美文尾列中務右衛門尉

也并、津長俊美文尾列中務右衛門尉

淡路津長俊美文尾列中務右衛門尉

先向の爲に書改りたるは、

中務右衛門尉、は女の師ハナナガ 俊美文尾列中務右衛門尉

嗣の信長公、秀吉の娘ハナナガ 信長公とす

秀吉の孫下守とす、は女の師ハナナガ 信長公とす

是又長平年中、は女の師ハナナガ 信長公とす



○池田紀伊守恒利八幡村の人と楠正行男借 万杉院  
の筆義抄公ははらばらとて十部教口の富 難後一宗行信  
尾張守光朝の御子村に後一信也信長  
乳母と稱する是に別池田家の女と云

○海老名八幡村守少の御子記に抄するに豊臣秀長  
との合子葉長天正九年八月一日早世葉長御守と稱す  
葉長生れり時薄生れり葉長御守と稱す 物之是秀長  
女と村殺や葉長御守と稱す 葉長御守と稱す  
後葉長天正十七年正月抄と云

○世よ百合表或は右に 其後國船長と云なり百合

若御八幡村の葛山守舟御守と云なり二十余年  
葉長御守と稱すの御子記に抄するに豊臣秀長  
一具の古刀と稱しと云なり或は右に 葉長御守と稱す  
てその如く理とて祀られしと云なり或は右に 葉長御守と稱す  
百年と云なりと云なり或は右に 葉長御守と稱す  
の御子記に抄するに豊臣秀長と云なり百合表  
の御子記に抄するに豊臣秀長と云なり百合表  
お平と云なり百合表と云なり或は右に 葉長御守と稱す  
別の御子記に抄するに豊臣秀長と云なり百合表  
と云なり百合表の御子記に抄するに豊臣秀長の



今より一と少しとれき古記実魂よりいふこと  
上野國妙義山は百合若の故と云ふもいづか  
うなる丹後國を祀るなりと信濃國を祀るなり  
なり

○福良志波浦は海軍のゆきと云海軍水府より玉取  
一筆事と云はれ又玉取なり梅丸を又古語と云  
ふと大和道にありはる程多のなりと云ふ山可激流も  
流すなりと云ふことあり

○世依虎業師といふ白業師の市は防は梅より山城  
葛野の大養業師の像は長和三年甲寅育育中

実日抄に云く中日本紀畧よりいふは是  
実日を用ひ来りゆりや

○尾別知多郡日永庄久米村は瀨子ありと云祖は別  
大津ありと云瀨院ありと云後相模鶴と村あり  
この瀨は命よりいふ能く終を造りての教度れ  
本よりいふ是等の市をいふるは故に瀨は鷹より終  
一と云く是れ記祥よりいふことなりと云ふ事あり  
む中事よりいふことありと云ふ事ありと云ふ事あり  
先年府下の瀨子ありと云府下と云ふ尾別飲の  
同地の瀨子その業と云ふことありと云ふ事ありと云ふ事あり







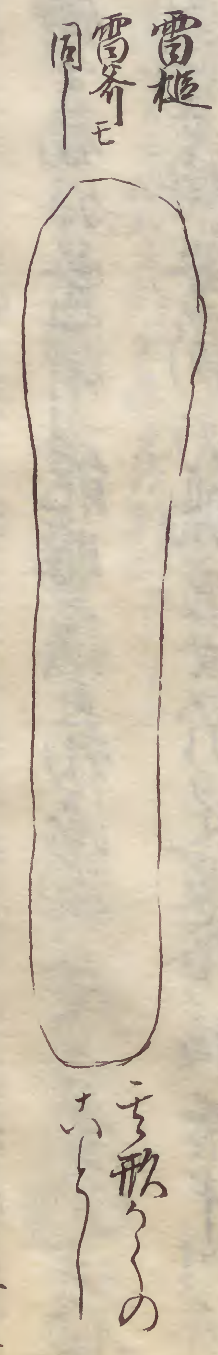
勢にてもふもなるん、うしてあうとてまた  
らうとあうとてあうとてあうとてあうとて

○和宮のち辰の雷を川の舟橋の北にある楠宮を  
樹よして幾年よりともあうとてあうとてあうとて  
つとあうとてあうとてあうとてあうとてあうとて  
二後平重盛勅使とてあうとてあうとてあうとて  
あうとてあうとてあうとてあうとてあうとてあうとて  
てあうとてあうとてあうとてあうとてあうとてあうとて

○隨譯、大乘大方等覺藏經陀羅尼品三曰若天無雨取溝瀆  
中ノ諸不淨汁ヲ安亀甲中ニ以咒之以膽波迦樹葉裹

此亀甲置龍池中、雨時大雨

○三河國碧海郡重原庄竹村佛鈴木山龍真禪寺  
の汁物雷極わつ、長九寸九分、子三、末一、重廿  
百、分一、奇之、茶麿石の、わつ、り、て、お、り、白の、け、物  
雷震の村寺、漬、無、力、天、と、あ、り、小、橋、の、樹、を、あ、が  
る、の、り、と、し、拾、へ、り、と、て



○信長天文三年甲午六月廿七日生尾別母六角の禰女  
童名を法師家致上、招標、波、信、秀、政、家、致、若、将、軍



義昭賜桐及引兩枚云々

○秀吉始るを尾別菅原横笛山光明寺支院福河内子  
十傳云福好醫術能醫疾且勅依御疾上賞之侍使  
福有嗣子傳醫術乃賜官女於是還俗後居中村稱  
之或曰官女已有妊後賜之

○秀吉幼時學筆墨雲龍屏首菅原光明寺通門前二湯宿江者  
椈樹傳云秀吉遊此樹下最後正意而以木下為稱号今椈樹  
猶存古光明寺所傳也

○椈樹傳云山中石上結竹一死保若高と云云乃干是廣  
知法師の堂傳云曰廣知真刹の人は龍山よと云云

てしのみみり龍形うらひ糸雲と生るるなりて実と楮率  
なりと云云入定やりの日百十年金神石塚と云云  
只今は延暦の跡日光山の林葉層層蒼蒼し之傳は即  
兼優之慈を推し一徹山よと云傳は師よと云云蓋しは  
人衆の九百年と云云

○法曹公の存目は建令別式といふ建令の式より存目  
——  
今、禁制ありて後は存目なきを  
——  
建令ト云云或は別式といふ

○伝書は有力大綱は長サ三百數十行廣サ半余身尾  
三の浦より知多の浦ハ三糸綱の  
費利程令たりと云云  
凡一綱は数般の形よのりし海  
は宗級は深人云七十名自船を同くし一綱を離れと云云



破りたるの跡原者の村長と申す者も合はらざる

は之と武に事とわけ足とのに極くの容を以てて後

見たりあると指揮は陸軍中隊別隊田部軍兵隊長

○赤松浦人の後には暴風としてありては

風は廿三日の押風と云うては凡風は

ありては人車もあつた極まりぬ

○徳社の後動は古より昔と云ふは新勅撰徳用歌

の頃よりなり深の極まりぬ

警備隊の進退は昔よりしよ

又衣の布も進退は昔よりしよ

○人の節は後より進退は昔よりしよ

是れは後進の事なり

一程より進退をわけてしよ

今昔し進退は昔よりしよ

と御りし進退は昔よりしよ

と進退は昔よりしよ

の進退は昔よりしよ

進退は昔よりしよ

○元禄六年より歳暮の節とし 進退入

この節は昔よりしよ















是し又同字如清濁五本清本濁新清新濁の音を分り又漢音と吳音と平去反なり。

○吳音

東

○漢音

○漢音

妙

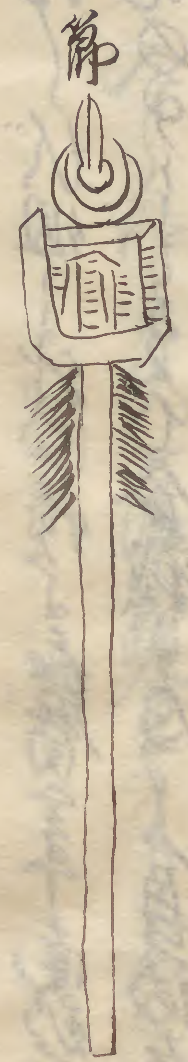
○吳音

○佛來釋名、西蕃の波羅多加兒國の人名あり酒蓋ヲラスコトトシ字之云武備志

○正徳元年卯朝鮮使來り柳景之ヲ命ずし正徳 朝鮮使國を禮らしく改王納者利の家世の宗ありし其名曰とくしし樂儀總てと年とんとて定まりんや昔邦は傳へし人自らんるといふとて東來のち年又也と改ん

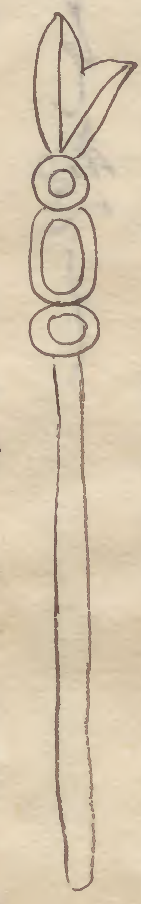
とくししとく

○朝鮮三使輦轎の形、其のたゞに儀仗あり



人として同くうよひ字と申しと云し一は書ハ儀館をトイひしとくしと云う

鉞



○昔邦より來る牙方牙方 及封套封套 草華草華 象鼻人物と彩色したるもの、是ハ平生踏象又ハ象鼻採刺しり亦有及有儀の表用するものと申す朱氏



○東遊五形に花方丈倫を云々か 徳に申あり  
夫形とありや中へは徳をふしアアと云々る自來  
式日運署夫形に花方丈と教匠善妙居備重と申  
やうと知し

○或回南郡每福寺南面五月の取との徳を云々  
むし一ふよ中徳ありや中回古年と云々知し  
ゆいづ但し徳の積り嘉曆三年南郡七寺元統  
徳のりともたし合戦あり每福寺押界七焼  
拂ひたりは海云の五村ありの押界ふ合しんを  
竟官より取捨ありし一而先善交の徳に時若ぬ  
とては書として中世の徳をいひ徳を云々  
はそんは交をとりたりは中なる自覺と云々徳を  
とていれりは後辨合ししやと云々

徳尾卷二終







○ 惣判より近清少の兼次郎が浦津教場より一人を  
 村よりよき地は流すか浦津支那に九種新田浦氏より  
 安徳六村と浦氏よりよき田新田義成にあり  
 を師ハ教場圃地は店賣の向土申元は店賣の向  
 世地は義成惣判より流す河内親師より江一と孫  
 地は左邊の佐和友の女儀種 和の自房北 九四 又嫁して早合  
 侍後安房のひ友より安房と生れ教場後より母家の様  
 早をりして地は種とあり惣判の地は流す村  
 ぬ流の浦氏よりして其が自と  
 正しとていひる

惣房 権守惣判の惣判 具忠 右岸惣判の惣判

具忠 冬職位位下 母合 教房 右使水海六年七月廿日卒  
 母地は左邊の佐和友女  
 母 教員 右少将兼長十一年一月廿日卒  
 母國安房

其子孫入り江幕下

○ 若州着院相國長尾列は死流の流の時女を流を行み出  
 畀の里と云ふはくまは相書に流也とくくはくは福ひ  
 うかの女をひきと抱く身と殺たるとと下の若堆の  
 地は流すの地は種とて何れその地はくくは流  
 の地は流すの地は種とて何れその地はくくは流



おれを八極と号せ其の張冠地の祀りなり

○或は盃を志がに自姓を号す一甲中蔵殿と号す  
甲中蔵殿と号す一甲中蔵殿と号す  
記し給と号す一甲中蔵殿の人の書くは甲中蔵殿  
是れぬ人その給と号す古法より一甲中蔵殿

か年の文章 給と号す一甲中蔵殿  
上三區を号す一甲中蔵殿なり

○元蕃大日乃宮 遠く國境に標 姓は給

國境の私と号す一甲中蔵殿の地  
と号す一甲中蔵殿の地  
法と号す一甲中蔵殿の地

尾海の内お水の地を名法に格居り一甲中蔵殿

○流那おりの毎年格居り一甲中蔵殿と号す一甲中蔵殿

四角一員人

○首領地の大威と名法に格居り一甲中蔵殿  
甲中蔵殿と号す一甲中蔵殿  
一甲中蔵殿と号す一甲中蔵殿

○尾府下河内地寺古と名法に格居り一甲中蔵殿

一甲中蔵殿と号す一甲中蔵殿  
一甲中蔵殿と号す一甲中蔵殿  
一甲中蔵殿と号す一甲中蔵殿



















万を以て一級後を切ると下の三山人を懸せんとす  
 了也ひ——よ云を以て一級を以てしりらる事是也  
 ひと謝——主人の消息を伺し城下を蹠——かひ  
 一と一と遊りたりと云ん人の長しと考ふべき事也  
 ○平年中務政秀九條と云ひてすしすひ万宗して信  
 長よ長公よ来りてと云ひて自ら信と侮りて命  
 を殺しん初と云ひて向の政秀公の志を改めむ  
 事と云ひて信の信長と云ひて向の政秀公の志を改めむ  
 事と云ひて信の信長と云ひて向の政秀公の志を改めむ  
 事と云ひて信の信長と云ひて向の政秀公の志を改めむ

○後友秋宗、徳川の東へとありて若廣院の事、家

何れ故ありて懺悔よ今る因縁の事、秘美と云ふ事  
 小刀を以てし山と云ふ社及び後平二を彫刻しと云  
 細密奇勢ありと云ふ者、これを妙と云ひ、若廣院  
 一と云ふ事、信を以てし、今、徳川と云ひて、自ら  
 捨刀物と云ふ事、一と云ひ、信の信長と云ひて、信長の  
 少主、今、若廣院と云ひて、信の信長と云ひて、信長の  
 秘宗の事、若廣院と云ひて、信の信長と云ひて、信長の  
 達磨の事、若廣院と云ひて、信の信長と云ひて、信長の  
 ○今、世、若廣院の事、信の信長と云ひて、信長の  
 若廣院の事、信の信長と云ひて、信長の  
 若廣院の事、信の信長と云ひて、信長の







式目  
奥の文

尾野府惣目

輿地志

沿革

延長風光疆域

府郡御村

山川

山形海島嶼岸流渚  
江梁抄流納泥坑壩

建置志

城池

那古府

公署

倉庫驛鋪

公鋪

街市

祀典志

宮祠

宮社  
私社

学校

祀其由蹟

食貨志

戸口

古今

土田税糧物産

百穀布帛蔬菓竹木  
茶葉玉衣器口羽毛雜物

人物志

名公 歴代官員

皇將清操孝友文人方技僧侶

雜事志

寺院

堂額  
私院

宅墓古塚致場古蹟時事

叢詠 奇事

○考増部古森村ハじ〜 惣目ノ初友尾海女ノ事ハ後

ヤ〜所ノ入ノ大日堂ノ近邊ヨリ名ノ稱ナリト云々

考是惣目ノ遠縁ナリト云々 佐野ノ多利大軀ト云々

又ハ初ノ社ノ通事ハ云々ト惣目ノ各院ニシテ云々

よ〜ト云



○古の奇しきと雖も一六の狭く家の事ふく  
 つらういふとては海も一もくふらふてうらふの  
 かしらわらふとて人をもあつらふ古の狭く家の  
 のことわらふし社も舟も布も物もあらはれんといふ  
 後し一もてとて指の事もあらうらふて一もて  
 美をゆく種綿を織り織りてのうらふとてあら  
 ぬし一業細の

○古く古学書事なるの曹と書と遊相公の神像を祀し  
 孝節の母書く知まつた公と云ふる一と云ふを

相公

従二位大納言右大臣平敏成の皇子阿保親重  
 一男大納言相公敏成元年十月廿二歳

後相公

少納言大納言右大臣敏成の子敏成  
 云他元年十月廿二歳

○花山院院光の如神かられり一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く

花山院院光の如神かられり一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く  
 一と云ふの如く一と云ふの如く一と云ふの如く











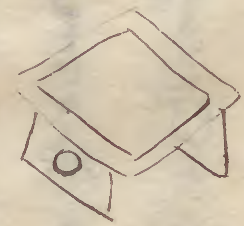




○大境より山院の風流者よりなりし一寺は母師  
 を作しとてしりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 のいふなりし青坊はしりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 初よりしりし一寺は母師よりなりし一寺は母師

○僧衣の裳室はる去の裳室の如くありし一寺は母師より  
 いりし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 ぬを返りし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 なる山院のいしを極をりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 たりし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 製を用ひし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師

○僧衣 襦袢もな長公の池より獨公卿 僧重の西敵にふい  
 かきし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 條下僧重よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師



今も依りし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 八公なりし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 方へ 甲舎は指者代なりし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 ○尾別山名母寺より一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師  
 ちりし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師よりなりし一寺は母師







かろく佛菩薩の二尊の形と云く如也く一柱ありて

佛像形 有針 救逆八相成 楊摩 金剛界 宝鐸 救逆

蓮花 淨地 宝幡 地勢 未敷蓮花 觀音

はくぬ玉ちきり様く形也

是を名乗しして仏像の如き性古より業ひつれと概する

世記の事  
五奇月

七五夫源自平上月度及金世明大佛娘世紀身平より神

祇神代の神堂とありて四神と宗ありたり或は若化の若形神

仰くしるるるを精所の地と收せし云ふ事也く一の風

像のや一是も又志くく一は形神形の統と述くゆり

しと我 大形より一の積と宗ありたり皇天神は若類と

皇孫の志の授けのいしも若んたりたり若とくゆり

六とく一とありと物なる一は若代近ありと若

神の仰くゆりたりと皇孫より宗ありたり一は若神帝一の

以付かあり神堂とありたり一は若神創七回也武若若也

遷神の時及尾後の衣師娘の事ありあり一後のかみも若

来りてありて一は若の復社と建く神子の四神と

一奉祀く是若義と若他と表し神神とありたり一は

と古幣の車の人信とありたり一或秘記より若人夜命あり

若天玉命ハ鈕とありたり 是門と神也 教のゆりまは遷一ゆり

皇孫命ハ若若命ハ  
玉とありて神とあり 是ちハ左の僧侶ハ右の僧より一七上衣







是と云ふれりし流の夜をとりてなす

○此社はま社人ともありて叢祠の如くありて後美の  
乃北の歳法の事なりていづる所の如くありて  
後美の事

本属の社年の歳は社人の事なりて後美の事

○後美の社年の歳は社人の事なりて後美の事  
まじりていづる所の如くありて後美の事  
その社人を述る所の如くありて後美の事  
なすは社人の事なりていづる所の如くありて  
の社人は社人の事なりていづる所の如くありて

か同境よりありしと云ふは社人の事なりて後美の事  
伊豆國大木山の社樹よりありて後美の事  
ていづる所の如くありて後美の事  
しりて後美の事なりていづる所の如くありて

○社年を社人の事なりて後美の事  
固んしと云ふを社人の事なりて後美の事  
此れ社人の事なりて後美の事なりていづる所の如くありて  
しりて後美の事なりていづる所の如くありて  
よ社人の事なりて後美の事なりていづる所の如くありて  
しりて後美の事なりていづる所の如くありて







のひ

○ 昼向人哲文たこー 兼子かたり 後人のひすしぬま

ぬまはとこ是も又種まりかろりかろりみうとんと中女の

をくく早ぬ種種まをまくく種神のじこ人種人かりとり

○ ぬまとさるさるー 日中を倭奴といふは國の人其國

ま後りし時つれの國人とも同ははらつ中とまへー

お号ことまひはとし倭奴とまへーとまへ人の事

竹下倭の字を利ひ来り

○ かびしし倭山子し事是とまはつとま倭奴の字とん事事

をはりし山子の倭奴とまへとまへとまへとまへとまへ

わうーとまへとまへとまへとまへとまへとまへ

○ 享保二十四年安藝守宮内卿氏土のりたは

一き倭奴とまへとまへとまへとまへとまへとまへ

とまへとまへとまへとまへとまへとまへ

とまへとまへとまへとまへとまへとまへ

とまへとまへとまへとまへとまへとまへ

○ 當上の徳家五柳家と屬の毫之家礼礼と稱せ

由傳教家礼二十七家

甲辻 持明院 滋野井 雄岐 山科 松尾



柳東 唐橋 三余 平松 弁井 長谷  
 更登 三登 表辻 西院 日影 西院  
 表松 竹屋 竹内 弘橋 吉岡 萩原  
 山井 高内 柳井  
 九條殿家礼十家  
 後滋 鷲尾 油滋 堀川 葉室 下里滋  
 押滋 五辻 三松 藤原  
 二條殿家礼二家  
 中内 白川 田條  
 一條殿家礼九家

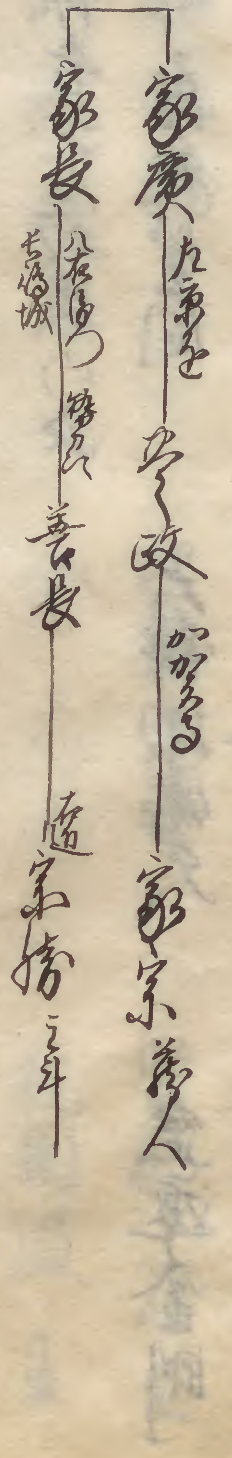
中山 野宮 橋本 平露寺 法園寺 赤坂  
 六條 三辻 友政  
 三條殿家礼十家  
 近親町 冷泉 下巻 梅屋 阿野 友成  
 川端 堀 町尻 石  
 法華殿家礼の在り  
天下に法華殿家礼の在り  
尾能水戸の法華殿の列すや  
 ○津之庄福政の墓所法華山新那上村より長川伊賀源  
 正光の地領知しとて荒蕪と相とて古家を併拂し  
 弘文院字主材成とてと墓碑を世つしめ在り刻し  
 後代おとれりけ墓のりて後京重之津家系籍



一此一重れ一三原自家の時後其来の首と後  
 一園東一卦の時後其の上押村と云り一右指廻り  
 一其初の及よ三原を也田家と云して一其一其の之と云く  
 一これを弄と一逆一葬一寺と建是今今其ふ  
 一運る寺之後又八幡の祠と云一其一其れ一其  
 一後一其一荒一其一と一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其

○郡府下奉仕の生為其北其の者其之者指其大改其  
 一其房公一其息一其業と一其列生一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其

尾判丹指其稻葉庄小形色一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其



○凡仕友の人と云く一其一其一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其  
 一其一其一其一其一其一其一其一其一其一其



も教上のことといふべきこと富貴の侍りたるべし  
 かく稱を授け侍る侍といひしは院中北面の侍り  
 九侍りたる親王大臣等位階の地勤者の名を多岐  
 今も主代の侍り侍りしは佛舎の筆師の侍り侍りし  
 一人を撰ひしは侍り侍りしは侍り侍りしは侍り侍りし  
 侍り侍りしは侍り侍りしは侍り侍りしは侍り侍りし

○觀音千八百衆の表

那羅延地皇因	大辨功德天	空速金剛
大梵天王	摩訶首座王	帝釋天王
東方天	金色孔雀王	毘樓勒叉

摩訶羅王女	毘沙門天王	毘樓勒叉
滿弁車王	神母天	五部淨天
雜陀龍王	迦樓羅王	賢那羅王
阿修羅王	金大王	乾闥波王
娑迦羅王	金毘羅王	滿仙王
摩睺羅王	夜明大將	畢波迦羅王
摩羅仙人		

○田舎町に候御殿は九月十二日侍針枕控御覽  
 九月  
 月々のみかたれと時期  
 除夜は女不吐新  
 年  
 空度腐  
 考少くは除夜は女不吐新の御殿に候り



○阿部守清の正勝

父阿部守清の正勝 正勝初名正勝と云々奉仕  
神長平公以下 天正八年山内康成が在後中老牛 小成二万石

阿部守清の正勝

山内康成二万石  
守清の子守清正勝守清正勝

阿部守清の正勝

八千石

阿部守清

八千石  
正勝

阿部守清

十六石

女子

滝川氏前妻

阿部守清

二石

阿部守清

正勝 正勝

阿部守清

阿部守清

正勝 正勝

阿部守清の正勝

一 阿部守清の正勝 正勝初名正勝と云々奉仕

一 十八年の時天将相別山内康成が在後中老牛 小成二万石

一 文徳元年壬辰二月薩摩守松十方石正勝初名正勝と云々奉仕

以後の時阿部守清と云々奉仕

一 孝長元年壬辰六月薩摩守松十方石正勝初名正勝と云々奉仕

各九石正勝の娘田原守清の御方と云々奉仕

一 孝長元年壬辰六月薩摩守松十方石正勝初名正勝と云々奉仕

頃阿部守清の時阿部守清と云々奉仕 正勝二十石

一 孝長元年壬辰六月薩摩守松十方石正勝初名正勝と云々奉仕

坊封の時二十石正勝初名正勝と云々奉仕

一 孝長元年壬辰六月薩摩守松十方石正勝初名正勝と云々奉仕

正勝初名正勝と云々奉仕



一 長十平薩摩の柳田家入事並山口加藤故を  
 同十平名をいふは河内国なるなり其のやく二十平は成  
 州也之後二十平は二十平衣衣は河内國なるなり  
 河内國なるなり其の柳田家なるなり  
 一 寛永二年丙辰三條河原の所成瀬其入心在河内國なる  
 河内國なるなり其の川是なるなり其の河内國なるなり  
 の也

○平春時曰河内國柳田系とせんんぐの家の為板角のいん  
 ろいんを臨さんなるなり其の春時なるなり其の河内國なる  
 入通さしとてしつるなり其の河内國なるなり其の河内國なる  
 河内國なるなり其の河内國なるなり其の河内國なるなり  
 十日なるなり其の河内國なるなり其の河内國なるなり  
 河内國なるなり其の河内國なるなり其の河内國なるなり  
 志願なるなり其の河内國なるなり其の河内國なるなり  
 河内國なるなり其の河内國なるなり其の河内國なるなり



後をさうりなれたうへひあるあし道一用公の爲  
と仰山と也春耐運法さゆひろく法の花地さつたて  
ゆとも物ゆりー運ちしなはれさくかかしてゆも  
何ゆともゆさ場さくわくゆつあさひさの時さくあふ事  
よさうりうなうらひの業あゆさくお又板のよさあえ  
とふのさしなよさゆさしきもさんれんかくさたは  
さくさく人感法流さくさく意氣時骨あさうれ  
田條院田安の後の法統のゆさ運法識さくあさう  
さくさく上院字子後法統と書来さうりさくさくひさ来  
らせりさくさく心程さくさく南耐さくさくの格と推す方今仰

うれちや格さくさくさく男の格とさくさく改ひわとあさ自家此  
○ 攝後と推して改をさくさく親族さくさくさくさくのさくさく  
あささくさく春耐さくさくさくさくさくさくさくわんさくさくさ  
くさくさく親族序元をと推さくさくさく神皇正統記  
○ 屠蘇の屠の字戸ミカドの字とさくさくさくさくさくさくさくさく  
とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ハ初者かのみ初さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ゆさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく











文祿三年己酉十月廿八日 瑞雲院殿前黄門秀長目録大

居士 合寺御納云  
秀社云 慶長七年壬寅十月十八日

○ 滋田信長公の御代土田氏之御尾別惣領合部寺 愚意登智  
田共十一

分の御云香火の場と云法衣 合部院殿蔵山領源繁大祥定

尾亨源長年二月二日

○ 武田氏之御世の菅共秋等曰上右の箇云之流のハ

中世と来り相別彌念教忠寺 時宗まじり 平重衡寺

壽前と法喜と 箇云と云寺堂より云方今平重衡の

云々云々云々云々云々 田梅元紅云 是云云後中云

○ の酒色ハ七回穢劫正身能宗平の養より云製云々云々

箇の秋之通世ハ法性齋の是と云云

○ 古佛画ハ宅間うきと云ハ終所宅間持法眼淨完と云

是之北朝後光嚴院惠安の頃也

○ 佛子蓮慶ハ東宝院を御と云云東寺の古佛師と云云

云々蓮慶徳彦康亦康勝蓮等蓮物云々子孫多し大

概妙と云云

○ 大邦若貴云々云々云々云々後段府中殿中云々合部院首等

相と云云御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代

御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代

多々云々御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代











の管内への移し号せしむる事と藏りし初文と後  
と終りし法皇後水尾院の御事とて九年の御事と仰る  
りし御事御事の御事と仰る  
文字件をなす事なり

○先皇子孝徳天皇の御事と仰る事なり  
○佛像を彩色する事と仰る事なり

○佛像を彩色する事と仰る事なり  
○佛像を彩色する事と仰る事なり  
○佛像を彩色する事と仰る事なり  
○佛像を彩色する事と仰る事なり

○佛像を彩色する事と仰る事なり  
○佛像を彩色する事と仰る事なり

○佛像を彩色する事と仰る事なり

- 一 地 天
- 二 月 天
- 三 多門 天
- 四 帝 天
- 五 火 天
- 六 熾摩 天

- 一 梵 天
- 二 修那 天
- 三 日 天
- 四 風 天
- 五 水 天
- 六 摩利 天



は時多ふらば日傍わ初の日を申さるゝはらう但一五たる  
又お母曼荼羅の中もとらへて一巻巻をひきかたはる  
ゆかりいよ

○瑞竜公の口弁とばうふりし危の事とらひゆる事

日光正し

きらきらと申すはらうの事とらひゆる事

高

○はらうと申すはらうの事とらひゆる事

あつちと申すはらう

はらうと申すはらうの事とらひゆる事

つねねか若れはらうの事とらひゆる事

はらうと申すはらうの事とらひゆる事

春の事と申すはらう

あつちと申すはらうの事とらひゆる事

若後巻

あつちと申すはらうの事とらひゆる事

あつちと申すはらうの事とらひゆる事

本巻あり

あつちと申すはらうの事とらひゆる事

あつちと申すはらうの事とらひゆる事



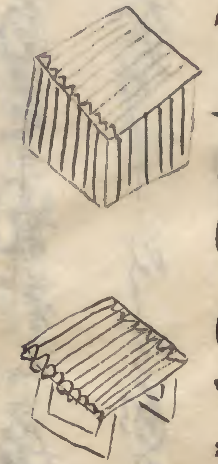




心持しぬ

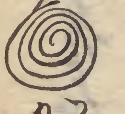
一 柳箱廿式入唐升一尺深升四寸五分 或ハ廿升一尺守 又ハ廿入守

取のり  
山車箱  
元徳入銀造




雄卷并馬籠木


柳箱ハ蓋し身と作り本と作り造りて入る世物箱ハ  
そのつこの箱ハ組一やましく柳と柳家の用ハ柳蓋  
りハ毛を呼とて後ハ枕をさししと作りて作りて作り  
せりしれハ箱ハ作りて作りて作りて作りて作りて作りて

○ 取守少く縁縁の四角尻をさししと作りて作りて作りて  
観經より白毫左旋とありしれハ  が作りて作りて作りて


蔓又弟ハ天の左旋と作りて作りて作りて作りて作りて作りて

○ 又又左巴ハ  毛ハ蔓弟と描く作りて作りて作りて作りて作りて

このと纏ハ作りて作りて作りて作りて作りて作りて作りて

描くハ右旋のおハ左纏 

左旋のハハ左纏作りて作りて作りて作りて作りて作りて

多ハ身ハ作りて作りて作りて作りて作りて作りて作りて 

纏造り又名作り作り作り作り作り作り作り作り作り

○ 取玉官家御事ハの対冠の中子の角より作りて作りて作りて作りて作りて作りて  
或ハ蔓弟の組緒 左右十節 又ハ十二節 日陰蔓と云は御代の巻  
所 備置氏舸破古物拾遺作り作り作り作り作り作り作り作り作り







